

# 養豚一貫経営の収益動向とその要因

西野松之（日本大学生物資源科学部）

## 要約

調査対象経営の種雌豚平均飼養頭数は平成6年から10年までは100頭以下で、平成13年は111.0頭に拡大したが、平成14年、76.8頭、平成15年、74.6頭で、集計戸数の減少とともに少なくなった。労働力員数は飼養規模の拡大にともない多くなり、減少にともない少なくなった。収益は売上高で平成4年、9年、13年に豚枝肉市場価格の高騰で販売収入が増加した。肥育豚販売収入は売上高、経常利益に影響し所得増減の大きな要因となっている。販売収入は生産および管理技術的な要因も関係するが、全体としては毎年、豚肉市場価格が最も大きく影響していた。生産費用の購入飼料費の価格変動は収益性に大きく影響した。生産技術（繁殖）に大きな変化はない。肥育管理技術は「上」以上適合率、飼料要求率、増体量で改善されているが、枝肉格落率、事故率は高くなる傾向にあった。

平成15年は種雌豚飼養頭数、労働力員数で少なくなった。種雌豚飼養規模の拡大にともない生産性（繁殖成績、肥育豚出荷頭数）が良くなる傾向がみられた。収益性では豚枝肉市場価格の下落で売上高、利益、所得で低下した。生産費用では購入飼料価格、もと畜費が増加した。種雌豚飼養規模別の50～70頭規模は経常所得が多く、家族労働力1人当たりの年間経常所得でも多くなった。所得階層間には売上原価に差がなく、売上高格差および営業外収益格差がそのまま階層間格差となった。所得の上位階層は多生産、多出荷、低コストを特徴とするグループであった。繁殖成績は種雌豚飼養規模が大きくなるほど、所得上位階層になるほど成績が良くなる傾向がみられた。肥育成績の「上」以上適合率、増体量は肥育豚飼養規模が大きくなるほど向上し、所得上位階層ほど「上」以上適合率、飼料要求率、肥育豚販売頭数で優れていた。子豚生産頭数規模別にみると生産頭数が多くなるほど所得が多かった。

## 1. 平成6年から平成15年までの動向分析

### 1) 経営の概要

#### 経営の概要

年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度
集計戸数	114	122	92	61	78	106	105	112	92	60
労働力										
労働力員数	2.7	2.4	2.2	2.4	2.4	2.1	2.1	2.8	2.0	2.0
うち家族員数	2.2	2.0	2.0	2.2	2.1	1.9	1.8	1.8	1.7	1.7
飼養頭数										
種雌豚	94.5	83.3	77.8	89.1	78.1	78.3	78.5	111.0	76.8	74.6
種雄豚	7.9	6.8	6.6	8.0	6.3	6.2	6.2	8.4	6.1	6.2
候補豚	9.1	7.3	9.3	9.8	7.1	7.0	6.6	13.2	6.4	5.1
子豚	254.7	232.3	219.7	299.5	184.8	194.4	198.7	262.1	209.1	202.6
肥育豚	771.0	678.5	587.9	678.8	663.7	655.5	633.4	859.4	573.5	573.5
出荷頭数										
子豚	49.3	17.2	17.6	14.8	20.3	8.9	6.8	15.3	16.6	19.5
肥育豚	1700	1533	1381	1704	1400	1449	1430	2002	1255	1324
候補豚	2	15	8	14	11	1	3	2	4	2

(1) 集計戸数は平成9年まで減少傾向が見られたが、その後は増加し平成11年以降は、100戸以上であったが、平成14年は92戸、平成15年は60戸に減少した。

(2) 労働力員数は平成14、15年に2.0人となり、最も少なくなった。平成13年は2.8人で、ここ10年間では最も多かった。家族労働力は年々減少傾向にあり、平成14、15年は最も少ない1.7人であった。

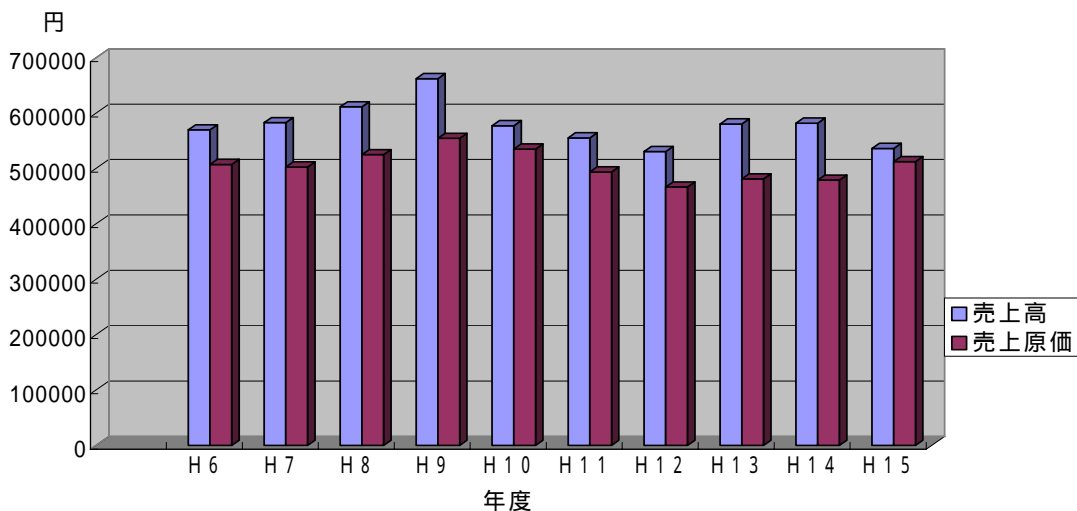
(3) 種雌豚の飼養頭数は平成12年までは70頭から90頭で、平成13年は100頭以上になったが、平成14年、76.8頭、平成15年は74.6頭に減少した。

(4) 肥育豚飼養頭数および肥育豚出荷頭数は平成13年が最も多く、平成14年、15年は種雌豚飼養頭数減少に影響され少なくなった。

(5) 種雌豚に対する種雄豚、候補豚、子豚の飼養頭数割合は平成10年(8.5頭)が、また出荷頭数の割合は平成9年(19.1頭)が高く、これらは生産成績が良好な年であった。平成14年、15年はともに割合がやや低く、成績が低下した。

## 2) 収益性

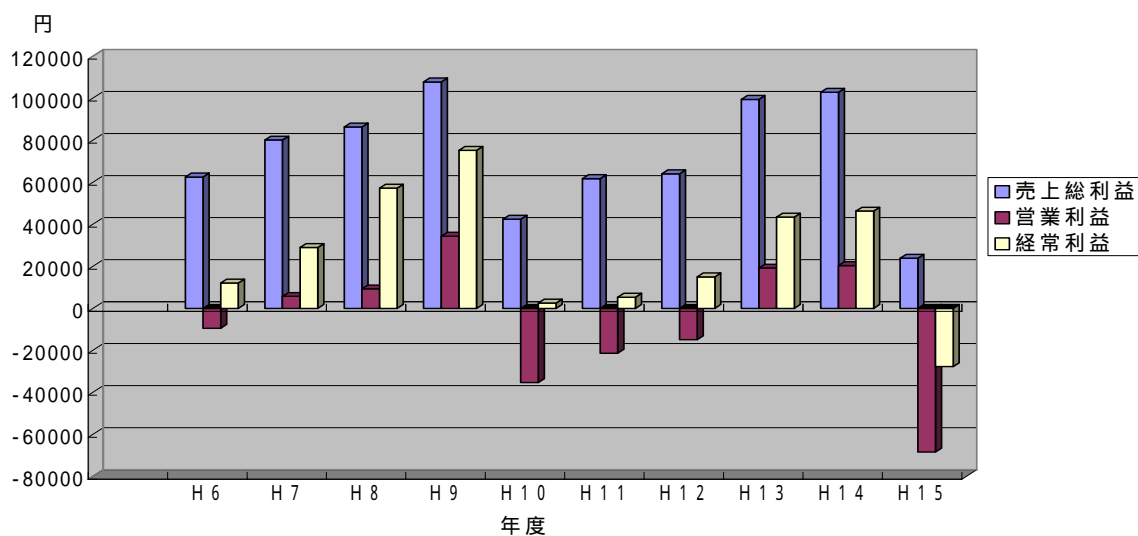
売上高合計と売上原価の推移(種雌豚1頭当たり)



(1) 肥育豚販売収入は売上高の95%以上を占め、その増減は豚枝肉市場価格に影響される。市場価格が高水準で推移した平成9年は肥育豚販売収入が種雌豚1頭当たり60万円を超えた。平成9年から12年は減少傾向にあったが、13年はやや回復し58万円となった。しかし、平成14年は56万円、市場価格が5年ぶりに低水準となった15年は、52万円に減少した。

(2) 売上原価は約47万円から約55万円の間で推移している。購入飼料費は売上原価の60%以上を占めるが、平成7年は飼料費の値下げもあり売上原価の59%にとどまった。売上原価が低くなった平成12年、13年も購入飼料費が売上原価の60%にとどまった。しかし平成14年は61%、平成15年は62.9%と高くなり、このことが売上原価を押し上げる結果となった。

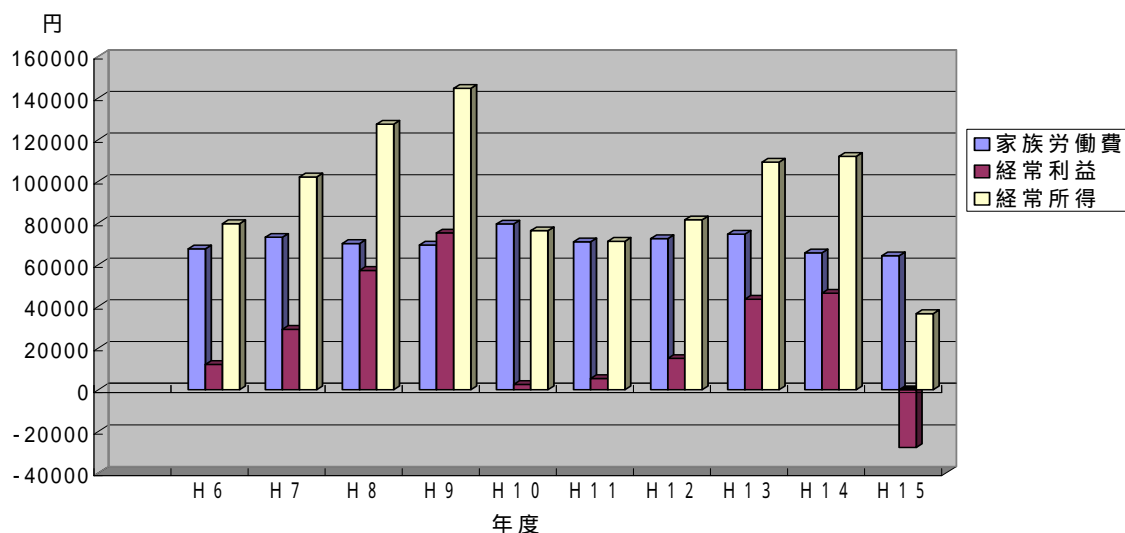
売上総利益、営業利益および経常利益の推移(種雌豚1頭当たり)



(1) 売上総利益も市場価格に影響され、売上高と同様に平成9年、13年、14年が高くなった。

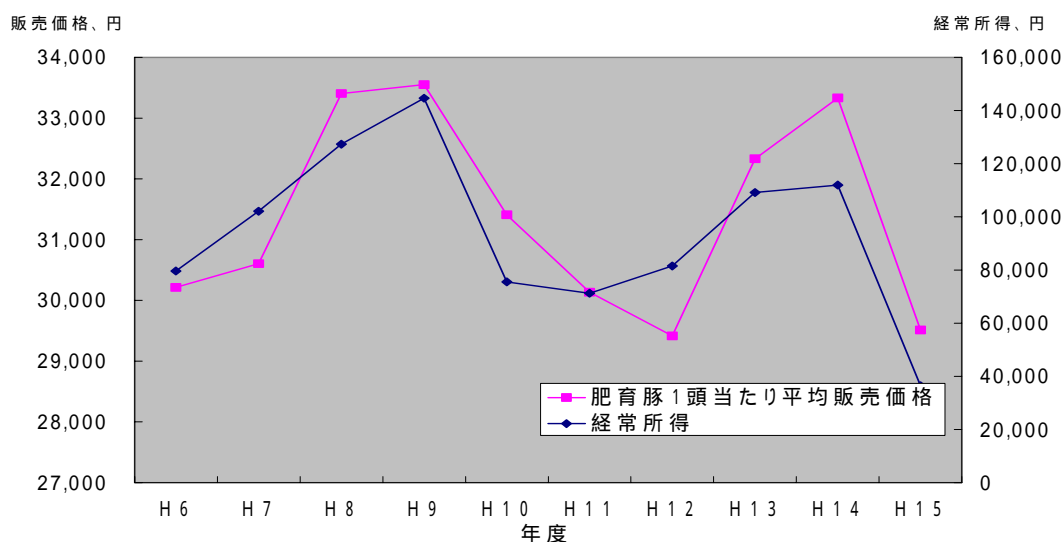
(2) 営業利益は平成6年、10年、11年、12年、15年でマイナスとなり、平成15年には経常利益もマイナスとなり、家族労働費を加えた経常所得でようやくプラスに転じた。

家族労働費、経常利益および経常所得の推移(種雌豚1頭当たり)



( 1 )家族労働費は平成7年以降は7万円以上で推移したが、平成14年は7万円以下になった。  
 ( 2 ) 経常利益、経常所得は平成6年から9年までは増加し、平成10年に低下、平成14年まではやや回復傾向にあった。しかし平成15年は平成14年に対して、種雌豚 1 頭当たりの肥育豚出荷頭数が1.1頭多いにもかかわらず、種雌豚 1 頭当たり売上高で4万円減、売上原価で3万円増（購入飼料価格分増加に相当）になっており、このことが経常利益格差74,004円、経常所得格差75,427円という結果になった。

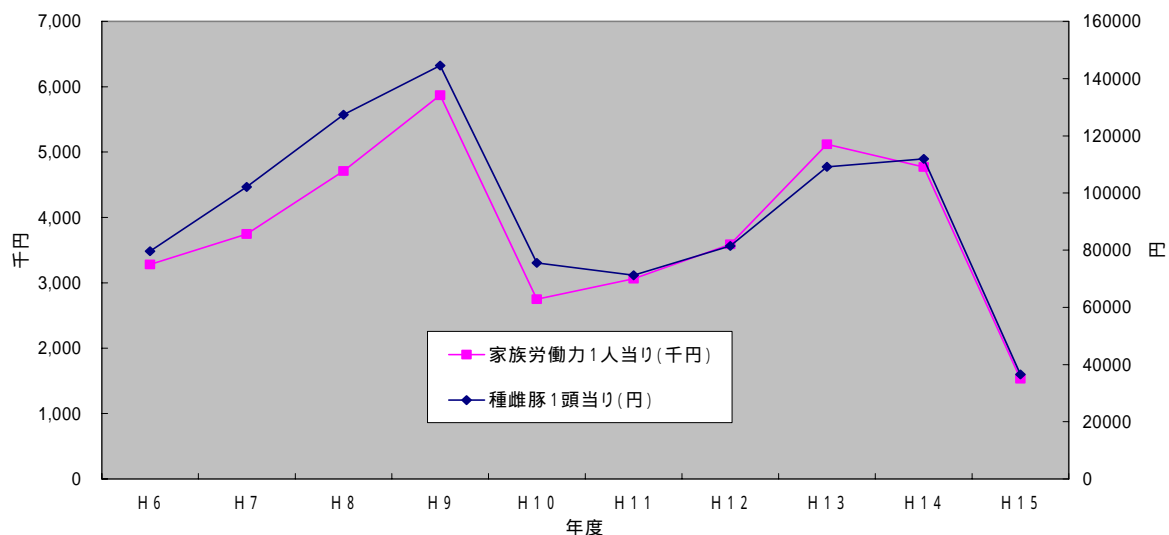
肥育豚 1 頭当たりの販売価格と経常所得（種雌豚 1 頭当たり）の推移



( 1 ) 肥育豚 1 頭当たり販売価格は、種雌豚 1 頭当たりの肥育豚出荷頭数とともに、肥育豚販売収入を大きく左右する。そして経常利益に最も影響し、経常所得の増減の要因となっている。肥育豚 1 頭当たり販売価格が、平成6年から13年が約3万円に対して、平成14年は市場価格の高騰で約4.1万円で33%も高くなった。しかし平成15年の種雌豚 1 頭当たりの肥育豚出荷頭数は平成9年に比べると1.4頭少ないため経常所得では平成9年ほど高くなるはならなかった。

( 2 ) 平成15年は肥育豚 1 頭当たり販売価格が最も低くなっており、この影響で経常所得も低くなった。

### 家族労働力1人当りおよび種雌豚1頭当りの経常所得



(1) ここ10年の調査対象経営の種雌豚飼養頭数はやや増加から近年減少の傾向にあるが、家族労働力員数は減少している。家族労働力1人当たりの年間経常所得と種雌豚1頭当たりの経常所得は同様の傾向となったが、平成15年は10年間で最低となった。

### 3) 生産性

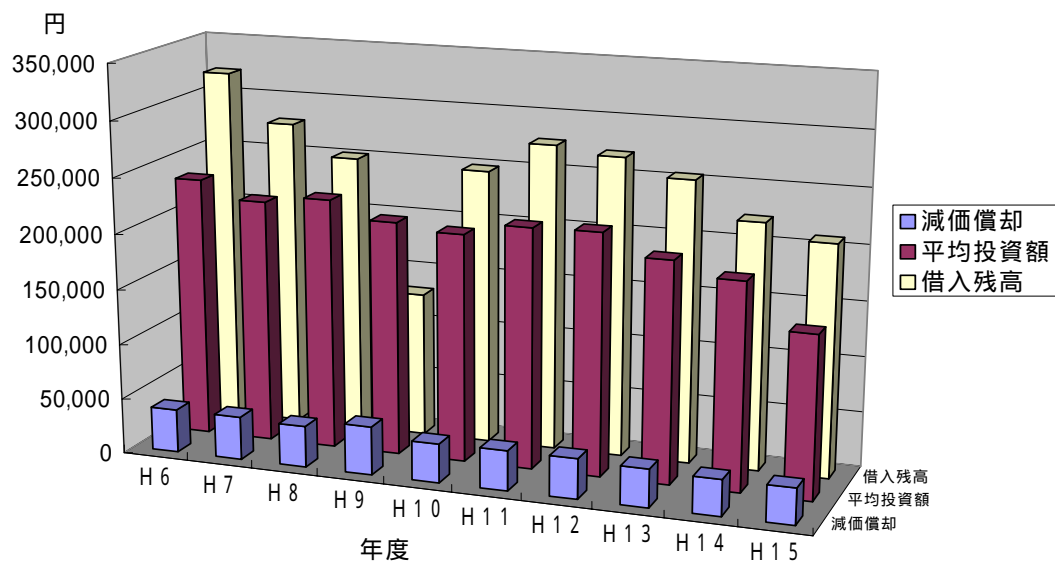
#### 繁殖成績および肥育成績の推移

	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度
種雌豚1頭当り年間平均分娩回数(回)	2.2	2.2	2.2	2.2	2.1	2.2	2.1	2.2	2.1	2.1
種雌豚1頭当り年間哺乳開始回数(頭)	22.5	21.2	22.7	21.8	22.3	22.3	21.5	21.7	20.9	18.7
1腹当り分娩回数(頭)	10.7	10.6	10.9	10.7	10.8	10.8	10.7	10.6	11.7	11.0
1腹当り哺乳回数(頭)	9.1	8.7	9.2	9.2	9.5	9.0	9.1	8.7	9.0	8.2
種雌豚1頭当り年間子豚産出頭数(頭)	20.1	19.2	20.3	20.4	20.0	19.7	19.1	19.5	18.9	17.2
子豚育成率(哺乳開始~離乳)(%)	89.9	91.2	89.4	90.0	89.1	89.6	89.7	90.8	89.1	91.4
種雌豚1頭当り年間肥育豚販売頭数(頭)	18.5	18.3	17.8	19.3	17.9	18.3	17.7	17.6	16.6	17.7
販売肥育豚1頭1日当り増体量(g)	607	597	587	588	591	595	601	600	630	706
枝肉規格「上」以上適合率(%)	53.5	48.8	51.0	52.8	52.5	50.0	50.1	46.9	47.6	50.6
対常規繁殖効率率(%)	11.6	13.8	12.9	14.8	13.8	15.4	15.7	17.2	17.6	16.1
飼料要求率	3.09	3.07	3.21	3.14	3.11	3.16	3.16	3.18	3.21	3.14
肥育豚1頭当り販売価格(円)	30,213	30,605	33,404	33,552	31,408	30,136	29,415	32,331	41,388	23,872

- ( 1 ) 年間の平均分娩回数と1腹当たりの分娩頭数はここ10年間大きな変化はなかった。
- ( 2 ) 哺乳開始頭数、離乳頭数は平成14年、15年に低下し、平成15年は最低となった。
- ( 3 ) 種雌豚1頭当たり年間肥育豚出荷頭数は平成9年をピークにやや下降気味で、平成14年は最も低くなった。
- ( 4 ) 枝肉規格「上」以上適合率、飼料要求率はここ10年間大きな変化はみられなかった。  
増体量は平成15年は700gを超え10年間で最高となった。
- ( 5 ) 事故率はやや増加傾向にあったが、平成14年(17.6%)が10年間では最も高くなった。

#### 4) 施設投資・資金借入状況

減価償却、平均投資額および借入残高の推移(種雌豚1頭当たり)



- ( 1 ) 減価償却と平均投資額には大きな変化は認められなかった。全体としては10年間は平均した償却終了と投資が繰り返されていた。
- ( 2 ) 借入残高は平成6年から9年は減少傾向にあり、平成9年は種雌豚1頭当たり約13万円で最も低かった。しかし平成9年の利益好調を機に平成10年、11年と借入残高が多くなったが、その後は減少傾向にある。

## 2. 平成15年度の収益性分析

### 1) 経営の概要

#### 種雌豚飼養頭数規模別の経営概要

種雌豚飼養頭数規模		全体	10-20頭	20-30頭	30-40頭	40-50頭	50-70頭	70-100頭	100頭-	
平成15年度 集計戸数		60	1	6	8	6	13	16	10	
%		100	1.6	10.0	13.3	10.0	21.7	26.7	16.7	
労働力	労働力員数(人)	2.0	1.1	1.2	1.2	1.4	1.4	2.4	3.7	
	うち家族員数(人)	1.7	1.1	1.2	1.2	1.4	1.4	1.9	2.5	
飼養頭数	種豚	雌(頭)	74.6	19.5	24.8	34.3	45.8	57.7	85.3	164.2
		雄(頭)	6.2	2.0	2.1	3.2	3.8	5.0	6.8	13.6
	候補豚(頭)	5.1		2.3	2.2	2.5	4.6	7.5	7.7	
	子豚(頭)	202.6	116.5	65.1	88.5	104.3	113.9	241.9	466.3	
	肥育豚(頭)	573.5	22.0	171.3	225.4	341.5	513.4	700.0	1163.6	
出荷頭数	子豚(頭)	19.5	228.0				1.5	57.6	0.0	
	肥育豚(頭)	1324	77	456	554	774	1108	1594	2765	
	候補豚(頭)	2						3	5	

- (1) 集計戸数60の平均種雌豚飼養頭数は74.6頭、種雌豚飼養規模の割合は、100頭以上が16.7%、70~100頭が26.7%で70頭以上の規模が全体の約半分を占めた。
- (2) 平均労働力員数は2.0(うち家族員数1.7)、雇用労働力は種雌豚飼養規模の70~100頭は0.5人、100頭以上は1.2人であった。
- (3) 種雌豚1頭当たりの肥育豚飼養頭数および出荷頭数は、50~70頭、70~100頭がほかの規模より多く、生産性が高くなる傾向がみられた。

2) 収益性の比較

養豚一貫経営の収益性

		種雌豚年1頭当り		
集計年度		平成14年	平成15年	
集計戸数		92	60	
種雌豚飼養規模		76.8	74.6	
売上高	子豚販売収入	2,985	5,402	
	肥育豚販売収入	564,589	526,767	
	候補豚販売収入	7,780	693	
	その他	6,538	3,387	
	計	581,892	536,249	
売上高原価	期首飼養豚評価額	125,935	146,132	
	当期生産費用	種付料	274	587
		もと畜費	18,747	21,216
		購入飼料費	295,102	322,085
		自給飼料費		
		敷料費	547	849
		労働費	72,483	69,927
		診療・医薬品費	21,858	20,975
		電力・水道費	18,290	18,491
		燃料費	6,070	7,418
		減価償却費	32,627	32,565
		その他	28,587	27,292
		当期生産費用合計	494,587	521,405
		期中種豚振替額	15,042	12,495
期末飼養豚評価額	126,422	142,648		
売上原価	479,058	512,394		
売上総利益		102,835	23,855	
販売費・一般管理費		82,488	92,219	
営業利益		20,347	-68,364	
営業外収益		42,265	58,082	
営業外費用		16,347	17,458	
経常利益		46,264	-27,740	
経常所得		111,944	36,517	
当期償還額控除所得		87,658	16,831	
同上償却費加算額		120,286	49,396	
家族労働力1人当り年間経常所得(千円)		4,773	1,533	

(1) 平成15年の平成14年に対する売上高合計は、種雌豚1頭当たりでは7.8%の減少、肥育豚1頭当たりでは42.3%の大幅な減少であった。

(2) 平成15年、14年の売上高合計に占める種雌豚1頭当たりの肥育豚販売収入は97%以上であるが、平成15年は肥育豚販売収入は6.7%の減少で、子豚販売収入はやや増加したが候補豚販売収入は少なくなった。

(3) 平成15年の平成14年に対する売上高原価は、種雌豚1頭当たりでは7.0%の増加となった。その要因は生産費用の62%を占める購入飼料費の上昇である。



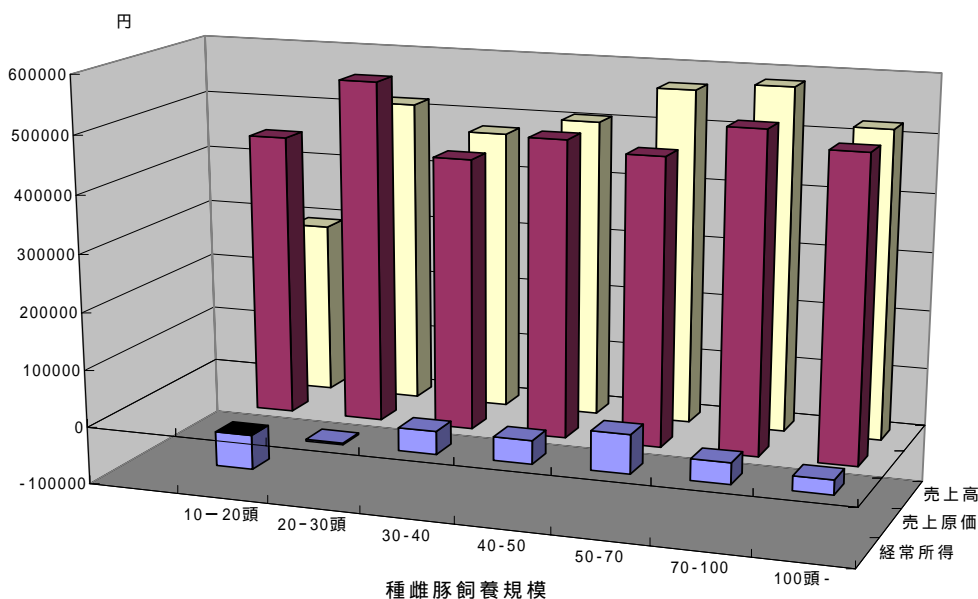
(4) 生産費用の購入飼料費は、生産費用合計の60% (平成14年)、62% (平成15年) を占めるが、平成15年は平成14年に対し、種雌豚 1 頭当たりでは9.1%と大きく増加した。

(5) もと畜費は平成15年に 2 万円を超え、平成14年に対して13%の増加となった。これは繁殖育成豚 (ハイブリット豚) 導入の増加にともなう価格の上昇が考えられる。以前は国内の繁殖育成豚販売価格は肉豚の枝肉販売価格と連動するような傾向があったが、コマール豚においては価格が上昇しておりそのことが影響している。今後は安定的な生産を期待するためにも、当期生産費用の購入飼料費、労働費、診療・医薬品費、に続き優良な家畜導入の費用として増加することが予想される。

(6) 平成15年度の平成14年度に対する損益は、種雌豚 1 頭当たりの売上総利益で77%の大幅な減少であった。これは枝肉市場価格 (中央卸売市場、1kg平均卸売価格) が平成14年の437円から、平成15年の354円に減少 (19%) し、肥育豚販売収入が減少したことが大きく影響している。平成13、14年は国内で B S E 問題、国外では豚口蹄疫、豚コレラの影響で国内の豚肉価格が高騰した時期でもあった。当期生産費用のうち、その占める割合の最も多い購入飼料費、もと畜費で増加しており、全体としては直接費用は増加、販売収入は減少となり、平成15年は平成14年に比べて利益および所得で大幅に減少した。

### 3) 種雌豚飼養規模別の収益性

種雌豚 1 頭当たりの売上高、売上原価、經常所得 (平成 15 年)

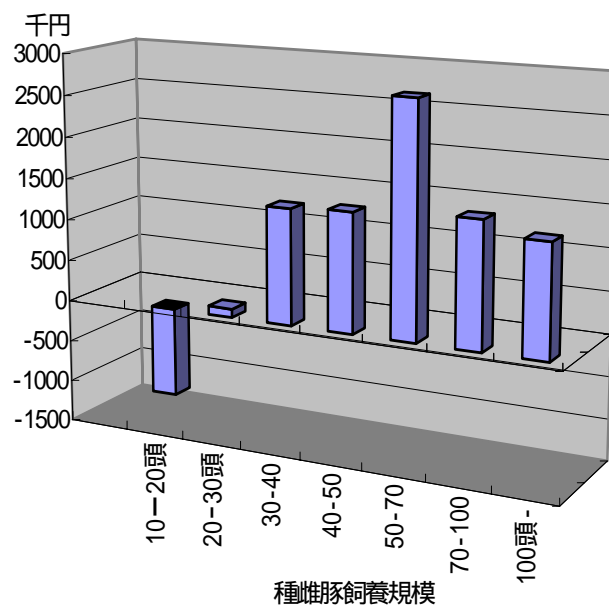


(1) 売上高は肥育豚販売と子豚販売を主とする10～20頭規模を除くと、70～100頭規模がやや高くなったが、20～30頭規模以上の階層間に販売収入に際立ったちがいはみられなかった。

(2) 売上原価は購入飼料費の増加影響で20～30頭規模がやや多くなったが、他の規模階層ではちがいはみられなかった。

(3) 経常利益は30～40頭以上の階層でかろうじてプラスとなったが、20～30頭以下ではマイナスとなった。

家族労働力1人当たり年間経常所得(平成15年)



(1) 家族労働力1人当たりおよび種雌豚1頭当たりの経常所得は、家族労働力が近年あまり変動していないので、種雌豚1頭当たりの経常所得の結果がそのまま反映され、50～70頭規模が最も多くなった。

4) 所得階層別の収益性

種雌豚年間1頭当り所得階層別の収益性(平成15年度)

(単位:頭、円)

		下位20%	中位60%	上位20%	
集計戸数		13	38	13	
種雌豚飼養規模		69.9	76.6	63.8	
売上高	子豚販売収入	14,651	14,984	51,810	
	肥育豚販売収入	440,081	503,458	519,504	
	候補豚販売収入	1,063	705	75	
	その他	880	4,892	5,830	
	計	456,676	524,039	577,219	
売上原価	期首飼養豚評価額	163,161	138,777	119,342	
	当期生産費用	種付料	280	670	471
		もと畜費	25,089	21,150	16,723
		購入飼料費	306,276	318,485	295,052
		自給飼料費			
		敷料費	1,883	503	564
		労働費	69,456	73,934	72,542
		診療・医薬品費	20,118	21,045	20,991
		電力・水道費	19,100	17,558	20,585
		燃料費	5,312	8,699	4,850
		減価償却費	25,921	34,795	36,897
		その他	22,256	29,248	36,202
		当期生産費用合計	495,692	526,087	504,877
		期中種豚振替額	10,211	11,320	16,121
期末飼養豚評価額	140,721	140,253	122,720		
売上原価	507,921	513,292	485,378		
売上総利益		-51,245	10,747	91,841	
販売費・一般管理費		78,856	87,236	105,508	
営業利益		-130,101	-76,489	-13,667	
営業外収益		41,359	55,236	110,735	
営業外費用		25,087	13,883	17,098	
経常利益		-113,829	-35,136	79,970	
経常所得		-56,661	34,202	151,935	
当期償還額控除所得		-78,674	14,066	141,944	
同上償却費加算額		-52,753	48,862	178,841	
家族労働力1人当り年間経常所得(千円)		-2,711	1,674	5,485	
種雌豚1頭当たり年間所得(円)		-56,661	34,202	151,935	

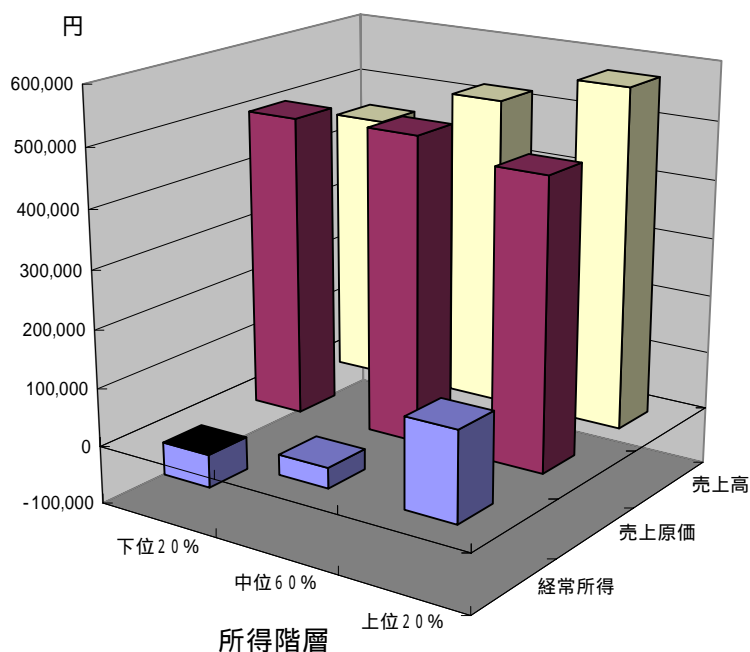
(1) 売上高の肥育豚販売収入は上位20%階層(519,504円)と下位20%階層(440,081円)との格差は79,432円で、これは全体の肥育豚販売収入減の影響で少なくなった。しかし上位20%階層は肥育豚販売収入のほかに子豚販売収入も多く、売上高合計では格差120,543円と多くなった。種雌豚1頭当たりの肥育豚販売収入は肥育豚販売価格と肥育豚販売頭数が影響するが、上位20%階層は子豚販売収入を得る生産性(繁殖・肥育)にも優れている多生産・多出荷・高販売グループであるといえる。

(2) 売上原価は上位20%階層が低く、とくに当期生産費用の購入飼料費でも低くなった。またもと畜費は生産性の向上を目指して育成豚の導入と関係するが、下位20%階層が多く、

所得上位になるほど少なくなる傾向がみられた。このことは育成豚の導入頭数と単価にも影響されるが、家畜導入費用が生産性に反映されていない状況を意味する。

(3) 上位20%階層と下位20%階層の經常所得格差(208,596円)は、売上総利益格差(143,086円)に営業外収益格差(69,376円)が加わったもので、この営業外収益には堆肥販売を有利に進めた状況がみられる。

種雌豚1頭当たりの所得別の売上高、売上原価、經常所得(平成15年)



(1) 全体としては階層間の売上原価に大きなちがいはないため、売上高格差および営業外収益格差がそのまま階層の經常利益格差になった。

5) 生産性(繁殖・肥育技術)の種雌豚飼養規模別比較

種雌豚飼養規模別にみた繁殖・肥育成績(種雌豚1頭当たり・平成15年度)

	20-30頭	30-40頭	40-50頭	50-70頭	70-100頭	100頭-
分娩回数	2.1	2.0	2.0	2.2	2.2	2.1
1腹当たり分娩頭数	10.6	9.9	10.5	11.0	12.2	10.3
哺乳開始頭数	15.3	16.8	22.0	16.9	20.9	20.9
離乳頭数	14.0	14.9	18.2	15.7	19.7	18.7
離乳育成率(%)	93.0	92.8	86.1	92.0	91.9	90.5
「上」以上適合率(%)	45.0	39.3	41.3	51.6	56.7	59.2
枝肉格落率(%)	2.0	12.1	16.7	35.2	23.0	24.2
飼料要求率	3.29	3.36	3.36	3.08	3.04	3.11
1日平均増体重(g)	664	665	638	737	705	756
対常時頭数事故率(%)	5.9	12.4	23.1	11.4	21.7	18.1
肥育回転率(%)	2.77	2.67	2.39	2.22	2.33	2.37
平均肥育日数(日)	152	151	164	146	151	143
労働力1人当たり肥育飼養頭数	145.6	233.8	251.1	371.4	336.3	360.8
肥育豚販売頭数	18.2	16.0	16.9	19.4	18.6	17.1
肥育豚1頭当たり販売価格	28,239	29,272	29,573	28,891	30,393	30,161
肥育豚1頭当たり売上原価(円)	31,854	28,768	29,781	25,052	29,027	29,998
肥育豚1頭当たり経常利益(円)	-5,999	-2,142	-2,288	392	-860	-963
肥育豚1頭当たり経常所得(円)	1,529	6,663	3,325	6,530	4,065	2,944

(1) 分娩回数は2.0~2.2回で階層間で大きなちがいはみられない。

(2) 分娩頭数、哺乳開始頭数、離乳頭数で、種雌豚飼養規模が大きくなるほど成績が良くなる傾向がみられた。

(3) 「上」以上適合率、飼料要求率および1日増体量は種雌豚飼養頭数規模が大きくなるほど好成績なる傾向にあった。

(4) 種雌豚飼養頭数規模が大きくなるほど枝肉格落率、事故率は高くなる傾向にある。50~70頭規模で枝肉格落率が高く、事故率は低い。70~100頭規模、100頭以上規模は「上」以上適合率が60%に近い好成績にもかかわらず枝肉格落率、事故率が平均より高くなった。これは豚枝肉の品質で有利に展開している一方で、事故などの損失も多いという面をもっているという結果となった。

(5) 肥育豚1頭当たり経常所得について、子豚生産頭数、肥育豚販売頭数、販売価格、売上原価で規模階層の特徴をみると、低所得となった20~30頭規模は少生産、高コスト、低販売グループ、高所得となった50~70頭規模は少生産、多出荷、低コスト、低販売グループとみることができる。70~100頭規模、100頭以上規模は多生産、多出荷、高コスト、高販売であるが、これは損益の結果からみると繁殖・肥育成績が所得に反映されていないグループである。

6) 生産性(繁殖・肥育技術)の所得階層別比較

所得階層別(家族労働力1人1日当たり)にみた繁殖・肥育成績  
(種雌豚1頭当たり・平成15年度)  
(単位:頭、円)

	下位20%	中位60%	上位20%
分娩回数	2.0	2.2	2.2
1腹当たり分娩頭数	10.5	11.3	10.9
哺乳開始頭数	17.7	18.5	19.8
離乳頭数	15.9	17.2	18.1
離乳育成率(%)	89.9	91.6	93.0
「上」以上適合率(%)	29.1	27.8	47.0
枝肉格落率(%)	17.4	10.0	22.7
飼料要求率	3.37	3.09	3.05
1日平均増体重(g)	724	689	734
対常時頭数事故率(%)	15.4	15.3	14.3
肥育回転率(%)	2.64	2.20	2.13
平均肥育日数(日)	139	153	152
労働力1人当たり肥育飼養頭数	211.9	279.7	361.7
肥育豚販売頭数	16.1	16.3	18.0
肥育豚1頭当たり販売価格	26,888	27,864	27,878
肥育豚1頭当たり売上原価(円)	31,548	32,143	25,239
肥育豚1頭当たり経常利益(円)	-7,070	-1,989	4,002
肥育豚1頭当たり経常所得(円)	3,519	4,985	13,947

(1) 1腹当たり分娩頭数、枝肉格落率を除くと、所得階層が上位になるほど好成績であった。

(2) 上位20%階層は子豚生産頭数、肥育豚販売頭数で、下位20%階層より多生産、多出荷グループであり、そのことは肥育豚販売収入格差に影響するはずである。「上」以上適合率の差からみても、販売価格は有利である。しかし上位20%階層と下位20%階層の、肥育豚1頭当たり販売格差(990円)は小さく、売上原価格差(6,309円)の方が大きくなった。これは枝肉の市場価格の下落による影響が大きかったことがあるが、損益の結果からみると上位20%階層は高販売ではなく、多生産、多出荷、低コストグループとみることができる。

7) 子豚生産頭数の収益性比較

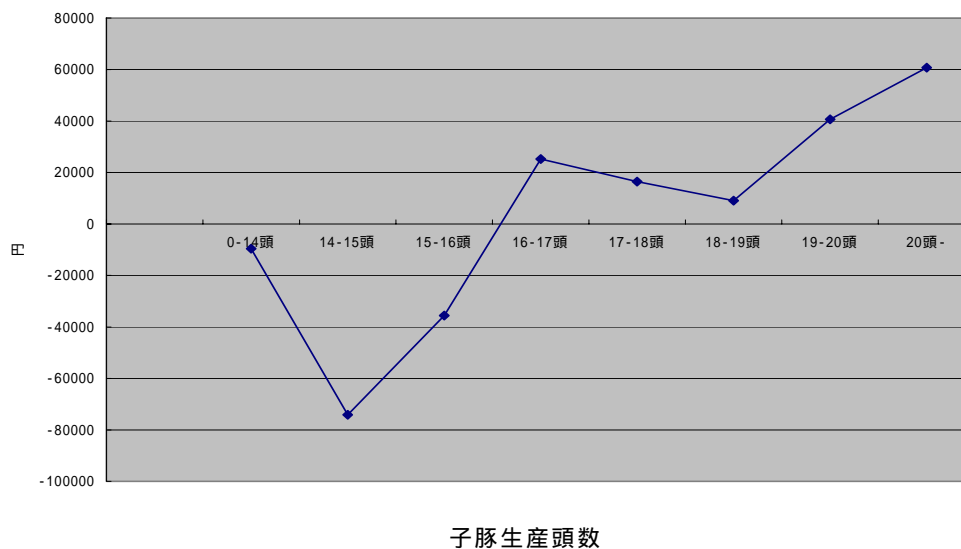
子豚生産頭数規模別(種雌豚1頭当たり)の経営概要

種雌豚飼養頭数規模		全体	0-14頭	14-15頭	15-16頭	16-17頭	17-18頭	18-19頭	19-20頭	20頭-
平成15年度 集計戸数		64	3	2	2	3	5	4	7	38
%		100	4.7	3.1	3.1	4.7	7.8	6.3	10.9	59.4
労働力	労働力員数(人)	2.0	1.3	1.8	1.7	1.0	2.2	1.2	2.1	2.2
	うち家族員数(人)	1.7	1.3	1.5	1.7	1.0	1.8	1.2	1.7	1.8
飼養頭数	種雌豚									
	雌(頭)	72.6	50.4	74.5	94.2	27.3	138.8	45.3	52.7	74.6
	雄(頭)	6	4.0	6.0	10.0	2.3	11.5	3.7	4.7	6.0
	候補豚(頭)	4.8	5.0	4.0	1.2	3.1	3.9	1.0	3.3	6.0
	子豚(頭)	202.9	120.8	313.5	248.2	66.9	469.3	82.0	151.9	193.7
	肥育豚(頭)	537.7	269.6	422.5	614.9	173.6	770.3	325.3	437.1	599.8
出荷頭数	子豚(頭)	79.1								133.3
	肥育豚(頭)	1241	758	1072	1136	387	1980	737	988	1364
	候補豚(頭)	2								3

(1) 子豚生産頭数が20頭以上(種雌豚平均飼養頭数52.7頭)は全体の10.9%で、次いで17~18頭(種雌豚平均飼養頭数138.8頭)が7.8%で多くなった。

(2) 種雌豚の飼養頭数規模と生産技術の関係は認められなかった。

### 子豚生産頭数規模別(種雌豚1頭当り)の經常所得



- ( 1 ) 子豚生産頭数は肥育販売頭数および肥育豚販売収入に直接影響し、当然ながら子豚生産頭数が多いほど肥育豚販売収入は多くなる。17～18頭、18～19頭は枝肉格落率、肥育事故率が高くなっており、結果として生産性を収益に反映できなかった経営が含まれている。
- ( 2 ) 図から試算すると子豚生産頭数1頭格差は、經常所得格差約13,000円に相当した。